

魚津中央通り商店街の防火建築帯の増減築に関する研究 その2
—防火建築帯の増減築に伴う空間利用と居住者の変容—

正会員 ○伊藤 野々香*
同 藪谷 祐介**
同 有原 千尋***
準会員 亀山 文音****
同 北野 まつ葉*****

防火建築帯 魚津市 富山
歴史的変遷 増減築 商業

1. 研究の目的

前稿では、魚津中央通り商店街の商業繁栄度を基準に時代を区分し、その区分ごとの商業需要と課題、建物利用の変容を分析することで、時代の変化によりどのように魚津中央通り商店街が変容してきたのかを明らかにした。本稿では、時代区分ごとに防火建築帯の増減築に伴う空間利用と居住者の変容を明らかにすることを目的とする。

2. 建物の増減築に伴った各店舗の空間利用の変容

魚津中央通り商店街の空間利用の変容を明らかにするため、表1のヒアリング調査を基に防火建築帯にある4店舗の各空間の利用方法の変容を平面図に示し、当時の商売と生活の様子を表す情報を図式化した。図1は、A店をまとめたものである。

A店(魚屋)…1970年(繁盛期)に防火建築帯の3階と後方のバラックを増改築した。1階は店舗とバックヤード、2階は両親の居住スペース、3階はAさん夫婦の居住スペースとして利用していた。現在は、両親が亡くなったため2階が空きスペースとなり、3階後方の洋間はクローゼットとして利用している。そのため、1階の店舗部分と3階の居住スペースが主に使用され、2階は浴室しか使用していない。また、アーケード撤去により生じた日射問題への対応として出入口扉の上部に黒いアルミを貼った。

B店(漆器店)…防火建築帯完成後の10年程、スナックと煎餅屋にバラックの後方を貸しており、商売が繁盛していた頃は空間の大半を漆器店の作業場として利用していた。2002年(変換期)に防火建築帯部分の改装を行い、店舗スペースを縮小した。作業場として利用していた空間も居室となり、居住スペースが拡張した。2008年に後方のバラックの改築を行い、居住者数に合った空間の大きさと使い方、動線計画となった。また、駐車場を防火建築帯とバラックの間に設けていたが、改築工事と合わせて後方に移動した。尚、防火建築帯の3階への増築は行っていない。

C店(手芸店)…1968年(繁盛期)に防火建築帯の3階と後方のバラックを増改築した。防火建築帯の1階を店舗として利用し、その他は居住スペースとして利用していた。しかし、C店の増築理由が2階の天井が暑いというものであったため、増築した3階は現在まで物置として利用している。1980年(繁盛期)頃に紳士服からジーンズショップへと業種が変化し、その際に2階後方の一室を従業員の作業部屋として利用していた。また、採光用の中庭を設けている。現在は子どもが独立したため2階に2室あった子ども部屋をワンルームとしたが、現在はCさん夫婦の2人暮らしのため、防火建築帯の1階と2階のみの利用となっている。再度業種が変わり、Cさんの子どもがパッチワーク店として1階の店舗を使用している。

D店(靴屋)…防火建築帯が完成したと同時にバラックを改築した。1965年(繁盛期)頃に、商売をやめ1階を使わなくなったので買ってほしいと隣人から依頼を受け、隣人との間の壁を壊して店舗スペースを拡張した。拡張した部分の2、3階は隣人の居住スペースとして使われていたが、1985年には全てのスペースを買取った。拡張した空間は倉庫として利用しているが、拡張部分の2、3階に行くには一度外部に出なければいけない動線となっている。また、採光用の中庭が2カ所に設けられている。現在は、2人の子どものうち1人が進学で県外に出ており、Dさんともう1人の

子どもの2人暮らしのため、防火建築帯の1階と後方の2階のみの利用となった。

調査期間	2020年6月8日-8月19日
調査方法	対面式ヒアリング
対象者	4店舗・店主 4人
内容	・増改築経緯 ・各期の空間利用の変容 ・各期の居住者の変容

3. 建物の増減築に伴った空間利用の変容

2章で整理した4店舗の主な空間利用の変容を、前稿で商業繁栄度により整理した区分を基に図2にまとめた。

建設当時…前方に防火建築帯が建設され、バラックが後方に移動した。防火建築帯の1階は主に店舗として利用され、その他は居住空間として利用される傾向があった。
繁盛期…バラックを壊して3階と後方に増改築を行った。

3階は居住空間、後方はバックヤードとして利用する傾向があった。また、採光用の中庭が設けられた事例もある。

衰退期…居住者の数が減り、増築した部分は空きスペースとなる傾向があった。

変換期…アーケードが撤去され、衰退期から生じた空きスペースが活用されていない状況である。日射への対応として、のれんやテントをかける店舗や検討する店舗が現れた。アーケードの減築により、かつての商店街の一体感は無くなり、各店舗の個性が現れる商店街へと変化している。

4. 建物の増減築に伴った居住者の変容

2章で整理した4店舗の主な居住者の特徴を、先述した区分を基に図3にまとめた。

建設当時…3世代の家族が暮らし、高齢世代は後方のバラック、若い世代は前方の防火建築帯で暮らしていた。

繁盛期…伯叔父母を含めた3世代以上の家族で暮らしていた。防火建築帯の増築によりバラックがなくなり、全員が防火建築帯で暮らしていた。居室が細分化され、ある程度プライバシーが確保されていたため生活に不便は感じていなかったと推察される。

衰退期…伯叔父母、兄弟は結婚を機に別の住宅を構えたため、防火建築帯には3世帯の家族が暮らしていた。

変換期…先代が亡くなり子どもたちが独立し、1世帯のみが防火建築帯で暮らしている。

5. まとめ

本稿では、時代区分ごとに防火建築帯の増減築に伴う空間利用と居住者の変容の特徴を分析した。その結果、魚津中央通り商店街の増減築の主な特徴として①防火建築帯の1、2階がコアとなりそれ以外の部分が増築している、②アーケード撤去により共同性が失われ、日射への個別対応が見られる、③防火建築帯の3階と後方の増改築した空間が空きとなり、活用されていないという3点が確認できた。また、繁盛期には、(i)後方の土地が確保できた、(ii)防火建築帯が増築可能な造りであった、(iii)商売が繁盛して資金があったことが重なり、増改築が行われていたと推察される。

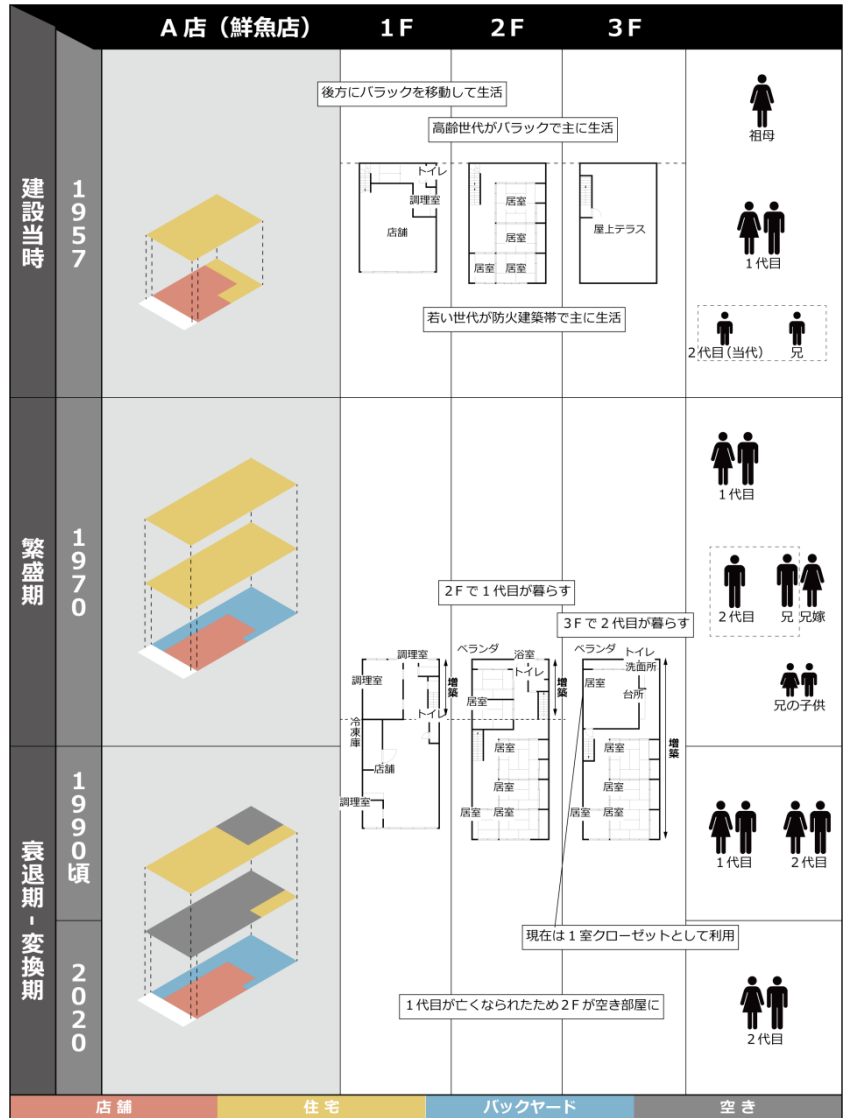


図1 空間利用の変容 (A店)

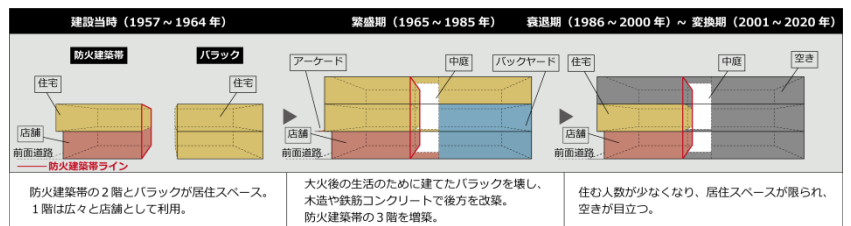


図2 主な空間利用の変容

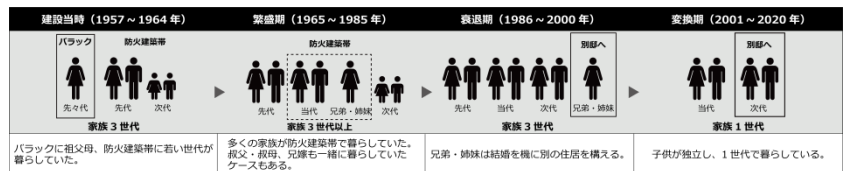


図3 居住者の変容

*氷見市地域おこし協力隊

**富山大学学術研究部芸術文化学系 講師・博士 (デザイン学)

***富山大学大学院芸術文化学研究科 大学院生

****富山大学芸術文化学部 学部生

*Himi City Community Development Cooperation Team

** Lecturer., Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, Doctor of Design

***Students, Graduate School of Art and Design, Univ. of Toyama

****Undergraduate., Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama